

観畜家のモンゴル人のみる等に話・民

鯉 淵 信 一

一、はじめに

古来、日本人は自然界の多くの事象に、特に植物に対して繊細な観察の目を注いできた。そして衣食住の殆どをこれら植物に依存して生活してきた。さらには樹木に神聖な霊をみとめ、花に人生の憐れを感じとったりさえてきた。実に、『古事記』に現われた植物名は七十八種、『日本書記』八十一種、『万葉集』一八二種であるとい⁽¹⁾う。その内実はともかく、この数字からも日本人の生活にとって、いかに植物が身近かなものであったかが想像される。

これに対して、モンゴル人の場合は、植物に対しては日本人ほどの関心は示してこなかったようである。十三世紀に書かれたチンギス汗の一生を記録した『元朝秘史』には十種類程度の植物名が現われるだけである。しかも、それは食用あるいはゲル(包)モンゴルのフェルト製移動式家屋の骨組みなどの役割で登場するのみで、花を觀賞

し、その美しさに感動するといったことは全くない。『元朝秘史』の場合は、それがチンギス汗の年代記的な性格のためかとも受取れるが、そればかりでもないらしい。現代モンゴル詩のジャンルでは盛んに花が取上げられてはいるが、一般的には、現在でも花への関心は低いといえる。花それぞれにモンゴル名は付いてはいるが、いくつかの目立ったものの以外は、モンゴル人は「白い花」「赤い花」で片付けてしまう。気候的、地理的に種類は少ないようだが、その数は少くない。夏ともなれば草原一面に美しい花が咲き乱れ、まるで花のジュータンを敷きつめたかと思われるほどなのである。

こうした草木に対する無関心さに較べて、動物に対する観察は極めて細かく、その描写は見事に生き生きとしている。例えば『元朝秘史』の中で、テムジン（チンギス汗の幼名）が弟のベクトルを弓で射殺した時、母ホエルンがテムジンを叱責する場面などは好例であろう。

「胞衣を咬む合撒兒（狗の名）の狗の如く、崖を衝く合卜蘭（獸の名）の如く、怒りを抑ふる能はざる獅子の如く、活きたるを呑むと云ふ蟒の如く、己が影を衝く海清の如く、聲無しにて呑む出喇合（魚の名）の如く、その子駱駝を後跟より咬む駱駝の如く、風雪に寄り頭口を害ふ狼の如く、その子どもを追ひかねてその子どもを喫ら鷲鷲の如く、その臥處を動かせば黨護する豺狼の如く、拏へて猶豫はざる虎の如く、妄に衝く巴魯思（獸の名）の如く、殺したり。影より外に伴なく、尾より外に鞭なきに」（卷二、那珂通世訳）⁽²⁾

諺や格言などにおいても、日本の場合には動物はあまり登場しないが、モンゴルのそれには動物に関連したものが極めて多い。ウランバートルで発行された『モンゴル諺の海』⁽³⁾（Монгол Цэцэн Угийн Далай）には約

一万一千余にのぼる諺・格言類が集録されているが、その中には夥しい数の動物に関連したものが入っている。正確に数えたわけではないが、全体の五分の一にも達するのではないかと思われる。そして当然のことながら、それらは動物の姿、習性、性格などを的確にとらえ、動物を通して人間社会の様々な事柄を巧みに描出している。

このように、日本人とモンゴル人の植物観、動物観には大きな相違が読みとれる。これはそれぞれの民族の基本的な価値観の相違に由来するものであり、容易に理解し難いものようである。その難しさは、例えば最近マスコミを賑わしている捕鯨禁止運動や日本人が犬などの動物を虐待しているという英国人の抗議などが、恐らく、殆どの日本人にとって、理解を示そうにも相手側の考えが理解の範疇外のこととしてとらえられている事実にもあらわれている。実際のモンゴル人との会話のうえでも、あるいはモンゴルの文学作品理解のうえでも、こうした価値観の相違から戸惑うことが多い。そこで本稿では、モンゴル人の生活の基盤となってきた家畜とモンゴル人との関り合い、彼等の家畜観を諺や民話などの口承文芸を通して考えてみた。

本稿の諺類は、主に『モンゴル諺の海』を利用してもらったが、むかしの人びとが長い時間をかけて経験と知恵から生み出した言葉を、しかも家畜に対する知識もなしに考察しようとするわけであるから、極めて独断的な、不正確な部分が多く含まれていることを予めお断りせねばならない。また、モンゴルの諺などほとんどの慣用句は「韻を踏まない諺はなく、縫目のない着物はない」という諺があるほど、頭韻と脚韻を踏んだ詩の形式をもっている。従って韻を踏むことに大きな比重がかかっているため、日本語に訳してしまうと、何故そうした比喩が使われるのか、その必然性がはっきりしなくなるものが多い。そこで原文を並記しておいた。尚引

用諺の下部にある数字は『モンゴル諺の海』の諺の番号である。

二、モンゴル人と家畜

モンゴルを中心とした内陸アジアの遊牧的牧畜がいつ頃、どのようにして形成されていったのか、最初に家畜化された動物は何だったかなど、牧畜の起源、その系統史などはまだ定まった説がないようである。⁽⁴⁾

いずれにせよ、モンゴル高原には紀元前三、〇〇〇年頃には細石器牧畜文化、そして紀元前一、〇〇〇年頃には騎馬遊牧民の根跡がみとめられるというから、この地域に住む人びとは、ほとんど有史以来家畜とともに生活していたということである。

こうした牧畜の民であるモンゴル人にとって家畜は大切な必需品であり、財産の全てであった。生活のあらゆる分野に、家畜を中心とした動物を利用してきたのである。彼らは肉を主食とし、乳製品を加工し、酒も家畜乳から製造し、衣服から靴に至るまで、さらには家屋さえも毛や毛皮を原料として作ってきたのである。家畜は財産であれば食い潰してしまうわけにはいかない。財産を守り、増やす努力がなされなければならない。日本人が田畑で泥まみれになって、心血を注ぎ、悪天候や雑草と戦いながら長い時間を費して稲の特性をつかみ、現在の稔りをもたらしたと同じように、モンゴル人は自らの財産であり、命綱でもある家畜を育て、増やすために全霊を傾けてきたのである。こうした、家畜に全霊を傾けた生活の中で、モンゴル人が特有の家畜感を生み出したことは容易に想像されよう。

日本人にとって家畜は、「犬畜生に劣る」という言葉で代表されるように、決して人間と同列の次元に置かれる

ことはなかったように思われる。昔から貴重なものとして大切に飼われてきた牛や馬、あるいは最も身近かな犬や猫にしても、日本人は大きな距離感をもって接し、そうした動物に仲間意識をもつようなことは殆どなかったといえる。もちろん、愛馬や愛犬といった言葉もあるように、動物に愛情をそそがなかったわけではない。しかし、日本人のそれは、特殊な個人の愛玩動物といった域を出ないし、しかも決して「畜生」という感情を棄て去ることはなかったのではないかと思う。

しかし、モンゴル人には家畜を不浄視する考えはない。モンゴル人は家畜や身近かな動物に親近感を抱き、時には仲間としての待遇さえ与えているかのように見える。例えば、モンゴル人は馬の頭をムチで決して叩いたりしない。中国人が馬の頭を叩いているのを見て大変憤慨したりする。これは馬の頭に「幸運の神」(Хийморь)が宿っているという信仰にもよるが、何よりも馬に対する一種の敬意であると彼らは言う。同じような意味で馬を荷駄用に使ったりするのを嫌ったりする。彼らは年老いた馬は馬群に戻して余生を送らせたり、また仔羊が生まれれば、冬季酷寒の時には家の中に入れて飼養したりする。動物を不浄なものとする日本人の感覚では到底理解できないことであろう。日本人の家畜不浄視観念が如何に根強いものであるかは、明治以来現在に至る一連の新平民、水平社、同和運動の根源を考えれば明かである。

「モンゴル人は家畜のお陰」 Монгол хүү малын хүч

モンゴルゲルは綱のお陰」 Монгол гэр үлдээрийн хүч (7631)

(ゲルとはお椀を伏せたような、フェルトでできたモンゴルの移動式家屋で馬やラクダの毛で編まれた綱で外側をしめ、安定させてある。中国語で包[[パオ)という諺がある。これには家畜が、単に衣食住を満たすものという以上に、

日本人が米に特殊な感情を抱き、初穂を神前に供えたり、死者に米飯を供えたりすると同様に、家畜に対して感謝の気持すら抱いていることが示されている。モンゴル人にとって、家畜は「犬畜生」として接し得ないものであったことがよく理解できる。

モンゴルで飼育されている主な家畜には、羊、馬、牛、山羊、ラクダがおり、これらは五種家畜と呼ばれて牧畜の中心となっている。その数は羊が一番多く約一、四五〇万頭、次に山羊約四五七万頭、牛約三三六万頭、馬約二二六万頭、ラクダ約六一万頭となっている（一九七四年統計⁵⁾、その他ヤク、トナカイなどが飼われているが数も少なく、地域も限定されている。豚や鶏は元来定着農耕民族の家畜であり、モンゴルでは漢人化した地域以外では飼われていなかった。現在でも、農牧業協同組合営の養豚場、養鶏場で飼われているだけで、一般牧民に飼われることはない。

そして、これら家畜にはそれぞれ主なる役割が定められている。馬は乗用としてのみ利用され、荷を載せることも、車を牽くこともない。牛は牽車用で、ラクダは馱載、乗用、牽車用として、また羊は食肉、乳、毛などを提供する。山羊は毛皮が主に利用されるが、その他に羊の群の中で飼われ、集団性のない羊群を先導する役割を与えられたりしている。もちろん、馬も牛もラクダも、その乳、肉、毛皮、毛などを供することはいうまでもない。しかし、例えば肉は羊肉が常食であって、その他の家畜を食肉用として屠殺することは稀である。定まった用途から外れた利用法―例えば荷駄をつんだ馬、牛車に乗った人間、山羊肉を食べる人間などはモンゴル人の美意識からすれば到底耐えられないことになるのである。

こうした家畜それぞれの役割、あるいは人間との接触の仕方、接触の度合い、家畜の姿・特性などの相違から、

それぞれの家畜に対する親近感、価値観も自然異ってくる。例えば親近感の度合いから見ると、乗用として常に身近かにいて、しかも肌を触れ合う関係にある馬との間には心の通い合う仲間としての交流が強く読みとれるが、馬に比べて一対一の接触が少なく、しかも食用としての用途が主な羊の場合には、最も数も多く、経済的価値が高いにもかかわらず親近感のはるかに薄いと言える。また家畜の特性などから、例えば山羊は品行、性質の悪いもの、牛はノロマの馬鹿、羊は温和なもの、馬・ラクダは有能なものといった見方をする。こうした見方と実質的な家畜それぞれの価値とは必ずしも一致してはいるわけではない。馬は実質的価値以上に高い地位を与えられていると言えるし、牛や山羊はその逆に、低すぎる評価が与えられているのではないかとも思えるのである。以下、五種家畜について、家畜別にその価値観、モンゴル人の家畜に対する接し方などを考えてみる。

三、馬

モンゴルの家畜の中で、馬は羊とならんで最も貴重な財産である。羊はどちらかという実質的財産としての価値が大きいが、馬は実質的価値のほかに装飾的な、社会的地位の象徴的な性質を強く有しているといえよう。従って優秀な馬群をもつことは、実質的財産である羊群をもつこととは異った意味でモンゴル人にとっては大きな喜びであったわけである。そして駿馬に跨がり、草原を馳駆することはモンゴル人、特に男にとつて最大の誇りだったのである。良馬をもつことへのモンゴル人の憧れは歌にうたわれ、物語で語られて尽きることがない、あらゆる機会にその願望は表明されるのである。

「男の胸の内、鞍つき轡つきの馬がかけめぐる
 энглэгдэг ийгэвчээр морьт
 хүнийг хүндийнхээр долоу нийжсэхийнхээр

女の胸の内、鍋やカマドがかけめぐる」 Эм хүний чэжгийн дотор тогоо тулга эргэлтэ

「男の勇氣　　Эр хүний зориг

鞍つき馬の能力」 Эмээлт моринь зориг (10906)

モンゴル特有の「世界の三つ(四つ)」⁽⁶⁾という格言的語句の中でも馬への憧れが次のように表現されている。

「世界の三つの飾りもの　　Ергэнгийн гурван чимэг

美しい娘は家の飾り　　Сайхан хүүхэн гүрийн чимэг

良馬は男の飾り　　Сайхан морь эрийн чимэг

針葉樹は山の飾り　　Саргар мод уулын чимэг

また、モスタールト(A. Mostaert)の採録したダラルガと呼ばれる幸福を呼ぶ祝詞にも「たてがみのよい種馬を持つ幸福、声のよい牝馬を持つ幸福」が祈られている。⁽⁷⁾

こうしたモンゴル人の関心のまとの良馬とは、まず第一に“早い馬”ということである。全てに先駆けて走り、しかも長い距離を走る耐久力に秀れていることが条件である。そして尻の肉付きがゆたかであくましいのも一つ条件となるようである。「元朝秘史」には、人びとがテムジンをチンギス汗に推戴するくだりに、もし汗になってくれたらチンギス汗に「多き敵に先鋒に奔りて、顔好き少女妃を、帳殿の房(8)に入りて、得て伴れ来て与えん。」他国民の頬美しき妃少女を、尻節好き　馬に騎らしめて伴れ来て与えん、我等⁽⁸⁾(巻三)という一節がみえるが、「尻節好き」とは尻の肉付きのゆたかなくましい馬の形容で、民話などにもしばしば現われる賛辞である。

“早い馬”への賛辞、良馬の特徴などを述べた諺などは枚挙にいとまがない。

「良き友人は石の要塞よりも力強く Сайн нөхөр чулуун хэрэмнээс ч бөх

良馬は大鷹よりも早く」 Сайн морь харцага шувуунаас ч хурдан (8509)

「良馬は耳に Сайн морь чихэндээ

立派な男は目に」 Сайн эр нүдэндээ (8497)

(後述するように、耳は馬の善し悪しを見分ける一つのポイントになっており、目は『元朝秘史』で「目に火あり、面に光あり」とテムジンを称えていることで分るように人間の有能さは目に現われるとする考えがある。)

「良馬は波れず Сайн морь эдэхгүй

立派な男は狼狽せず」 Сайн эр гутахгүй (8498)

「早い馬」への関心は、当然その観察の鋭さになって現われてくる。ゾーン・モド市で発行された『早い馬の特徴』という小冊子がある。⁽⁹⁾これはナーダムの競馬に自分の馬を出走させようとする牧民に向けた手引書であるが、早い馬の外形的、内的特徴などを驚嘆すべき細かな観察の目で説明している。ほんの一部を抜粋してみる。

「早い馬は額が広く、顎が大きく、胸の肉が良く、脛が長く、真直ぐで短い踵腱をもち、眼は鋭く、耳元は太く、耳の先端は薄くて固く、耳の内側の毛は長く、距毛の内側にコブをもち、頬皮は薄く、柔い毛をもち、顎の溝は舟のように深く、……………隅歯と歯の間隔が大きく、隅歯が鋭く、隅歯の方向が曲っており、腰部が高く、腱は弓の弦のように惰力があつて固く……………またたてがみ、尾毛は疎で、尾は弾力性があり、……………二才馬時には昼間殆ど横にならず……………云々。」まさにモンゴル人ならではの馬に対する観察である。

モンゴル人の馬に対する関心の深さは、馬に関連した語彙の豊富さからも理解できる。年令別、牡、牝別はも

ちろん、毛色別の呼称、馬体、馬具の名称など、それぞれ特定の語を有しており実にその豊富さは驚くべきものがある。そしてこの馬に関する諸語のほとんどは、他の牧畜用語の多くがトルコ語からの借用語であるのに対して、純粹なモンゴル語に属しているとクローソン (G. Clauson) によつて指適されている。⁽¹¹⁾

こうしたモンゴル人の良馬に対する憧れや親近感は、民話などの中に、ある時は主人公として、またある時は心の通い合う伴侶として馬を登場させることになる。モンゴル人は馬の中に聡明さや力強さを感じとり、しばしば人の言葉を理解すると信じ、ある時には人間に優る能力さえ認めて、多くの口承文芸に極めて重要な役割を担わせて登場させている。

民話にはしばしばモンゴルの端から端を、世界の端から端を瞬時に駆けぬけてしまふ馬が登場して、主人公を目的地に送り届けたりする。馬頭琴の由来を語る有名な「フフ・ナムジル」(Хөхөө Намжил) や父親の教訓の大切さをテーマにした「父親の三つの遺言」(Эцгийн гурван захиа) などに登場する馬は、そうした役割を担つて活躍する代表的なものである。モンゴルの著名な口承文芸研究者である P・ホルロー (П. Хорлоо) 博士は、このような瞬時に世界を駆けぬける馬の登場について「古来、馬、羊、牛、ラクダ、山羊の五種の家畜は、それぞれ出生が異なる神話的伝説が語り継がれてきた。即ち、馬は風から、羊は天から、牛は水から、ラクダは太陽から、山羊は岩から生れたというのである。この伝説に基づいて、人々は馬は風から生れたために、雲のある空の下、尖った木の上を飛び、一年行程を一ヵ月で、一ヵ月行程を一日で、一日行程を一時間で、一時間行程を一跳びで駆ける馬を創つたのである。」と指適している。⁽¹²⁾ この「馬は風から、羊は天から云々」の伝説はモンゴルを中心に広く伝播しているものらしくポターニン (Г. Н. Потанин) も『西北蒙古誌』⁽¹²⁾ の中にキルギス人の話

として収めている。

またこうした物語の中で、馬は多くの場合、主人公の援助者となり、主人公を失敗や危険から守る最も信頼すべき仲間となって登場する。そしてこのようにモンゴル民話において主人公と駿馬が常に行動を共にするのは、決して偶然ではないとして D・ツェレンソドノム (D. Цэрэнсодном) は「民話の英雄は悪魔や食人鬼等の有害な敵を倒し、愛する伴侶を得たり、全ての人々に幸福をもたらすなどの立派な仕事の全てを、己の乗っている駿馬の力によって成し遂げているのである」と『モンゴル民話研究』序文に述べている。¹³⁾ 有名なモンゴル神話『ゲセル・ボグド物語』に登場する英雄ゲセル・ボグドと彼を援助する駿馬などは、まさにその典型と言えよう。また、モンゴルの古い英雄叙事詩『ジャンガル物語』などにもしばしば主人公と馬が対話し、馬が主人公を援助する場面がある。「美丈夫ミニヤン、トルコ汗の駿馬一万頭を追い立てる」章などがそれである。これらはほんの一例に過ぎないが、馬が「畜生」としての扱いを受けていないばかりか、人間の願望を満たし、更には人間社会に教訓さえ与え得る仲間として迎えられていることが分る。

更に言えば、駿馬と共にある生活の中においてこそ、モンゴル人は自らの理想の姿をみることができ、心に安らぎを得られたのではないかと思われる。

「男の喜び Эр хүний жаргал

無人の大草原」 Эзгүй хээр (5745)

無人の大草原にいる時が男の最も幸福な時だという意味だが、この無人の大草原にいる男の傍らには、当然馬がいることは言うまでもない。

「男は大草原に死に

Эр хүн хээр үхэх

牡馬はノタック*でなく死ぬ」 Эр морь нутаггүй үхэх (10918)

*ノタック……生れ故郷

生れ育った土地にしがみついているような者は立派な男とは言えず、故郷を離れ、人のいない大草原で朽ち果てるのがモンゴルの男らしい死に方だといった意味だが、前の諺と同じように、ここでも大草原に死ぬ男の傍らには馬がいるはずである。そして、いつも男と共にいる駿馬も故郷を遠く離れて死ぬ運命にある。換言すれば、モンゴル人は「死」を考える場合にも、死に際には、そばに馬がいることを連想し、それによって安心を得ているのではないかと思えるのである。動物を不浄視する日本人からは生まれ得ない、騎馬民族ならではの馬に対する考え方であろう。諺ではもちろん、馬の良い面ばかりが強調されているわけではなく、

「気まぐれな馬に乗れば狩の途中で後悔し

Али морь унавал авьд дунд гэмшиглэн

嫁った妻が合わなければ死ぬまで後悔する」 Авсан эмгэйгээ таарахгүй бол үхлэн гэмшиглэн (175)

とか

「悪い馬の

Муу моринь

跳躍は乗り手を振り落すよう Цогих нь булгих шиг

跑足は跳躍のよう」 Цогших нь цогжих шиг (2013)

といった表言も少なくない。しかし、こうした「気まぐれな馬」とか「悪い馬」も、馬を人間の仲間と認めたらうでの「気まぐれな馬」であり「悪い馬」であって、モンゴル人と馬との仲間意識を盛り立てる役割を果たしているかに見

える。

四、ラクダ

ラクダもモンゴル人の生活に重要な役割を果たしてきた。毛、乳、肉などの利用はもちろん、馱載、乗用のどちらにも使用され、特に寒さ、乾燥に耐え、行軍力が強いために、長期の旅、隊商などに重宝がられた。「ラクダはゴビの飾り」という言葉があるように、ゴビ地帯に多く飼われている。ラクダに対しては、乗用にする、或は長い旅を共にするといった親近感からか、またあの独特の風貌からか、馬とは違った意味でモンゴル人は特別な愛着を感じているようである。

モンゴル人と馬との関わり合いは、何となく生真面目な関係、言い換えれば、人間が馬に対して信頼と敬意を抱き、紳士的な付き合い方をしているといった感じを受けるが、ラクダとの関係は、それに「ユーモア」が混った付き合いといった感じがある。モンゴル人にとってラクダは忍耐強く、力強い大変頼りがいのある仲間であると同時に、どこか間の抜けた、ユーモラスな存在でもあるようである。ラクダは民話や諺など口承文芸の中に、恐らく、馬について犬や牛などと並んで数多く登場してくる。ただ馬が人間との関わりを強く保ちながら登場するのに対して、ラクダは人間との交流は少なく、民話の中では、所謂動物譚的なものの中に多く現われる。

モンゴルの口承文芸の大きなジャンルに謎々（*Онголо*）がある。一九六六年ウランバートルで発行された『万の謎々』（*Тумш Онголо*）という謎々集には五、〇〇〇余の謎々が収められているが、その中に、ラクダに関するものが約四〇種集録されている。その他、子供向けの書物にもラクダに関する謎々が多く収められている。

モンゴル人から見たラクダの特徴が良く表現されていて妙である。二、三紹介してみる。

「ネズミの耳をもち

Хулгана чихтэй

牛の毛をもち

Ухар үстэй

トラの足の裏をもち

Барсын таватгай

ウサギの鼻をもち

Туулайн хамаргай

へびの首をもち

Могой хүзүүтэй

馬のタテガミをもち

Моринь дэлтэй

羊の頭をもち

Хонинь голпойгой

猿の尻をもち

Мичий бөгстэй

鶏のトサカをもち

Гахийн мандалгай

犬の肚をもち

Нохойн гэдэстэй

猪の尾をもつもの

これなあーに」
Гахайн сүүлтэй

これは十二支に付会したラクダの十二性として言い伝えられているものである。ただモスタールトの採録したもの、および後藤富男氏の報告したものは若干の異同があり、地方によって言い伝えは少こし異なるようである。礎野富士子氏は、このラクダの十二性の謎々に関して、「他の家畜にはそうした伝えがなく、牧民がなほ多少の『ものめずらしさ』をラクダに抱いている反証のように思われる。またラクダが蒙古に来った日の比較的浅いことを物語っているのではないだろうか」と指摘している。¹⁵⁾ 次のような『頼りがい』のある、堂々としたラクダの姿を想

起させる次のような謎々もある。⁽¹⁶⁾

「二個のバケツ（のような）の脂肪を Хоёр хувин өрөм

背中にひっくり返えて背負い Нуруундаа хөмөрчүүрээд

食べ物が足りない時には Хоол хүнс дутахад

秘密のそれを吸い取り Нууцхан гүүнээ шинж

三カ月の断食も Гурван сарын мацгийг ч

苦しむことなく克服する Гунигтүхэн давах

黄金の国の Алтан шаргал орны

静かな巨人 Хэнэггүйхэн аварга

民話に登場するラクダは、どこか間が抜けていてユーモラスさを感じられたりするものが多い。ラクダがなぜ十二支に入らなかったかを説明した「ラクダとネズミの二匹」、或はラクダに鹿のような角が何故ないのかを説明した「ラクダと鹿の二匹」⁽¹⁷⁾などはその好例であろう。この民話は両方ともモンゴル人の間に広く伝わっているもので、モンゴル人のラクダ観の一つを表現した代表的なものといえる。前者はモスタールトが「ラクダとネズミの二匹」⁽¹⁸⁾、ツェレンソドノムが「ラクダとネズミの争い」として採録している。後者は、地方によっては鹿の代わりにトナカイが登場したりするが物語の大意は変わらない。モンゴル人の目に映るラクダのユーモラスさを見るために、ソドノムダルジャーの採録した「ラクダと鹿の二匹」を引用しておく。

「昔、ラクダは鹿のように十二の枝をもつ角と馬の尾のようなふさふさした尻尾を持っていた。鹿や馬にはそ

れがなかった。ある時、ラクダは水のみ場に行つて、水を飲みながら水に映る自分の姿の美しさに見惚れていた。そこへ鹿がやってきて、今日、森の動物達の集会があります。しかしこの格好ではとても出席できません。ほんの一日で結構ですからあなたの素晴らしい角を貸して下さいとラクダにたのみ込んだ。明朝にはこの水場で必ず返すという約束のもとにラクダは鹿に角を貸してあげた。この話を聞いた馬が、またラクダの所に来て同じようにして美しい尻尾を借りていった。しかし、翌日もその翌日も、今日に至るまで鹿は角を、馬は尻尾をラクダに返さない。ラクダが水場に来て自分の姿をみて狼狽し、頭を振り、またいつも水を飲んでは森の方をみつめているのはそのためである」。

この「ラクダと鹿の二匹」にある、遠くをいつもみつめているようなラクダの姿、そして馬にとられてしまったという尻尾、この二つはラクダの姿の中でも、モンゴル人の目に特にユーモラスに映る部分らしい。これを引合に出した諺が少なくない。

「天をラクダに監視させ Тэнгэрт тэмээ үзүүлдэг

大地を豚に監視させる」 Гаазрт гахай харуулах (9054)

意味は「餅は餅屋」といった程度のものであるが、ラクダの遠くをみつめるようなユーモラスな仕草が想起される。

「テへの角が天に突当り Тэхийн эвэр тэнгэрт гүлж

ラクダの尻尾が地に届く」 Тэмээн сүүлт гаазар хүрэх (3705)

*テヘ……………野生の牡山羊

これは大げさな喩えとして使われる。色々な動物の尻尾の中でも、ふさふさした毛のある馬の尻尾がモンゴル人

には最も素晴らしいものと映るらしい。

民話にみるようなラクダの間の抜けたような姿は、実際のラクダの動きにも多く見られるという。例えば、長いラクダの隊列を組んで旅をする時など、深い窪地があると先頭に進む者はその窪地を出来る限り遠廻りするという。なぜかという、後方のラクダが少しづつ内側に入ってきて、窪地に近すぎ、最後方のラクダはその窪地に落ちてしまうという。ひどい時には、同じ窪地に二頭も三頭も続けて落ちることがあるという。前のラクダが落ちて、後方のラクダはその窪地を避けようとしないのでという。(木村肥佐生教授談) 余り賢くないといったラクダのイメージはこんな所からも出ているのであろう。こんな諺もある。

「一頭のラクダのフンに

Нэг тэмээний хорголонд

千頭のラクダが滑り落ちる」

Мянган тэмээ хальтирдаг (2526)

些細なことにも用心が肝要だという教訓だが、前述の窪地に落ちるラクダを考え合せると、この教訓にラクダが引合いに出された意味も納得できる。

モンゴル人のラクダ観には、このような間の抜けたような、何となくユーモラスなラクダ観と、もう一方では忍耐強く力強いものといったラクダ観がある。

「ビーモリをもつ男と去勢ラクダには Хийморьтой хүн, агай тэмээнд *ビーモリ……: 幸運、護符

行けない土地はない」

Хүрэхгүй газаргүй

「犬は吠えるもの

Нохой хулаач

ラクダは歩くもの」 Тэмээ алхач (2424)

「同じ速さで歩くラクダの性格」 Тэшиж явдаг тэмээний зан

一定しない速さで歩く子供の性格」 Тэгшгүй явдаг багын зан (3707)

「馬より良い乗物はない」 Мориноос сайн унаагүй

ラクダより良い荷駄運送はない」 Тэмээнээс сайн хөсөггүй (7632)

また、このように忍耐強く、性質温順といったラクダ観と同時に、その内に、特に種ラクダが発情期に示す凶暴さ、普段温しい去勢ラクダが気に入らない時に見せる押しも引いても動こうとしない頑固さなどから、モンゴル人は人間の手で律し切れない気性の荒さをラクダに感じとっている。

「牡ラクダが唸って走り出すと」 Бууран тэмээ хурхрэн гуйвэл

索纏はなくなり、鼻柱は裂ける」 Бурангалгүй болж, дэвсэг нь сэтэрнэ

交尾期（冬十二月、一月頃）に入ると牡ラクダは狂乱状態になり口から白い泡を吹いて相手（人、畜）かまわず攻撃する。頭を低く地面すれすれにして唸り乍ら走る。当然、走る内に手綱を踏みつけ鼻柱（手綱を結びつけた棒片が鼻柱を通っている）は裂け、手綱はなくなるということである。

またラクダが「裕福」、山羊が「貪乏」の代名詞的な扱いを受けたりするが、これは山羊の項で詳述する。ここではラクダと山羊が不釣合いの、両極端の対象として現われる一例を挙げるにとどめる。

「不釣合いというのは」 Тэг тэнгүй гэхэд

ラクダと山羊のようなもの」 Тэмээ ямаа хоёр шиг юм

五、牛

牛は役牛として、また食肉用、乳用としてモンゴル人の生活に大いに貢献しているのであるが、諺などにおける地位はその貢献度に見合ったものとは言い難い。モンゴル人は「牛のような馬鹿」という言葉をよく使い、牛に對して、五種家畜の中で最も「愚かな者」という評価を下しているのである。

「食べる時には雄虎のように
Илэхдээ эр бар ний

行う時には鈍重な牝牛のように」 Хийхдээ хашин бүх ний (1667)

「牛は同じように鈍重
Ухэр адиг хашин

狐は同じように臆病」 Унэг адиг хулчин (4182)

「牛で行くのは歩くのより一つまし
Ухрээр явахад явганаас нэг дээр

仲間と別れるのは死んだより一つまし」 Уенээс сагахад Ухсэнээс нэг дээр (9558)

牛の行動のにぶさが生んだ言葉であろうが、まさに牛が「鈍重、愚鈍」の代名詞的な扱いを受けている。しかしこの牛の「鈍重、愚鈍」さはモンゴル人にとって必ずしも軽蔑し切ったものでもなさそうである。その「鈍重」さを評価するような諺もある。モンゴル版「兔と亀」であろう。

「正しく進めば
Унэнээр явбал

牛車で兔に追いつく」 Ухэр гэрэгээр гуулай гүйцнэ (4103)

また、モンゴル牧民の最大の敵である狼と対比させることによって、この「鈍重さ」の奥にある牛の「誠実さ」「温

和さ」を強調している諺もある。モンゴル牧民にとって羊や馬を襲う狼は最も貪欲な、ずる賢い、憎んでも憎み切れない動物である。

「真実とウソの二つ

Үнэн-хүдэл хоёр

牛と狼の二匹と同じ」 Ухэр-чоно хоёртой адил (9500)

このような牛の憎めないような「鈍重」さは、多くの民話の中にも描かれている。ポターニンが『西北蒙古誌』に紹介している「牡牛」二編、ツェレンソドノムの『モンゴル民話研究』にある「牛の鞞丸」⁽²⁰⁾などにはそうしたモンゴル人の牛に対する見方がよく描写されている。特に「牡牛」には牛の「鈍重さ」と同時に牛の「誠実さ」が描かれ、人間と牛との関係がよく分る。一編だけ紹介している。

「一人の老人が牡牛を一頭もっていたが、その背中を傷つけたので、これを野に放った。ところが、かささぎが来て、彼の背中を更にひどく啄き破り、狼がきて彼の尻を食い破り、狐がきて正面から飛びかかった。老人が牡牛を見にやってきたとき、残るのは頭部のみであった。しかし、頭は彼にいった。私が食われたって、悲しむには及びませんよ。私の頭を叩き潰しなさい。二本の角の間から、六年間施しを乞わなくても暮らせるだけのものが見つかるでしょうと。老人は頭を家へ持ち帰って、これを打ち砕いた。すると一本の角の中には銀を、もう一本の角の中には金を発見したのであった」。

このように、モンゴル人は牛に対しては「鈍重なもの」、「愚かなもの」といった低い評価を与えつつも、その「鈍重さ」の中に、「ユーモラスな」、「誠実な」要素を見出してその価値を充分認めていたであろう。牛の家畜としての実質的な価値は、次の諺でみるまでもなく、極めて高いことはいままでもない。

「昼失くして夜 Өдөр алдаад шөнө

牛失くして羊」Ухрээ алдаад хонь (2838)

牛を失くして羊を探すの意である。実質的な牛と羊の価値の差は、牛一頭に対して羊約五―七頭にも達するのである。

「言葉を追求するより Үг хөөлөцлөхөөр

牛を飼え」 Ухрээ харигч (3998)

牛の「鈍重さ」が、それなりに評価されている様子は前述した。これとは別に、何としてもモンゴル人に認められない、モンゴル人の美意識に適わない牛の姿がある。牛に乗った人間と角の欠けた牛の勇気のなさである。

「真実を語った人には、人が敵意を抱き Үнэн үг хэлсэн хүнд хүн эшөөгэй

牛に乗った人には、犬が敵意を抱く」 Ухэр унасан хүнд нохой эшөөгэй (4081)

「仔牛に乗って乗りものに乗ったことにならなく Үгэл унаад унаатай болдоггүй

叙事詩を読んでお経を読んだことにならなく Үуль уншиад номтой болдоггүй (3590)

日本では平安時代など盛んに牛車が乗りものとして使われたりした時代があったが、モンゴルでは牛車を含めて牛に乗るということは、騎馬民族としてのプライドが許さなかつたらしい。

「角欠け牛の主人は Мухар ухрийн эзэн

くだらない事に勇ましう」 Муу ядалд эрэлхэг (1973)

角の欠けた牛は、角のある牛とは決して争おうとはせず、仔牛や弱い牛ばかりいじめるので、「弱い者いじめ」、「勇

気のない奴」という評価が下されている。従ってその持主も本当の勇氣を持ち合せていないという意味で、「勇氣」を尊ぶモンゴル人の輕蔑の対象となるわけである。

六、山羊

山羊は羊と同じように、その肉を食用とし、乳を加工し、毛、毛皮が利用される。しかし、その質は全てに羊より劣るとされており、又、その習性もモンゴル人の美意識には合わないようである。また、山羊はほとんど単独で飼われることはなく、羊に付随した家畜として羊の群の中で飼われている。従って、山羊に対するモンゴル人の評価は極めて低い。諺や民話に登場する山羊も全く良い役は与えられていない。会話の中でも「山羊のような奴だ」というと「性格の悪い、卑しい性格の人間」を指す意味となってしまう。

「羊の代用は山羊 Хонины сэлбэг ямаа

食事の代用は野菜」 Хоолны сэлбэг ногоо (9922)

という諺がある。モンゴル人のいう食事とは羊肉料理である。野菜は彼らにとっては全く食べ物のない時に仕方なしに口に入れるもので、普段は山羊や羊のエサに過ぎないと考えている。山羊は野菜ほど輕蔑された存在ではないが、あくまで羊の代用でしか過ぎないわけである。

「あわてた人 Нарсан хүн

山羊を飼う」 Ямаа тэжээх (5862)

という諺がある。これは「丁度「あわてた人」は食はもらいが少ない」といった意味になる。

「食困している時に Ядаж Байхад нь

山羊で支援する」 Ямаагаар туслах (5881)

貪乏に苦しむ人に役にも立たないもので手助けするといった意味である。

まさに山羊は家畜の範疇に入らないといった扱ひ方である。これらの諺から山羊に対する評価がいかに低いかが理解されよう。では一体、山羊の何がこうも評価を下げてしまふのかを見てみよう。こんな謎々がある。答は山羊である。

「乳が薄く、横腹が細く、性格が大ゲサで、口にヒゲのあるもの、これなあーに？」

肉については、

「山羊の肉は冷えつばい Ямааны мах царцамтгай

どんな男も忘れつばい」 Ямар ч хүү мартамтгай (11041)

という諺がある。山羊の肉はラクダ肉と同じように「冷い肉」だから沢山食べると体に悪いといい、熱いうちに食べるという。毛皮についても、

「山羊の蒙古服はいかに柔いと言つてもきつむという Ямаан дээг хэдий зөөлөн боловч хард гэнэ

姑はいかにおとなしいと言つても醜悪とごう」 Халам эх хэдий номхон боловч даг гэнэ (11040)

という諺がある。肉は冷えつばくて、乳は薄くて、毛皮は固くて、しかも性格が悪いというのでは評価が低いのも止むを得ない。

山羊の姿・形や習性もモンゴル人の美意識には適さないようである。

「山羊の尻尾が千回動くより Ямааны сүүл минга хөдөлсөнөөс

羊の尻尾が一回動く方が良い」 Хонины сүүл нэг хөдөлсөн нь дээр (5923)

小人物が集まってワイワイやっても仕方ないといった意味に当るが、これはモンゴルの羊の尻尾が脂肪を沢山たくわえた立派な脂肪尾羊であるのに対して、山羊の尻尾は細くて短く、貧弱にみえることからきている。従って「山羊の尻尾のような羊」は軽蔑の対象となるのである。

「ハエが後足で蹴ってもホコリは上がらない Ягаа гуйлавч гоос дэлдэхгүй

山羊が後足で蹴っても鞍はこわれぬ」 Ямаа гуйлавч янгирлаг эвдэхгүй (5901)

これも小人物には大したことはできないことの喩えである。

また「山羊のように大ゲサな奴」 (Ямаа шиг янгууч) といった慣用句がよく使われる。本来に山羊が大ゲサなのかどうか分らないが、山羊の啼き声の大きさと、その群れから離れて飛びはねる姿はモンゴル人に目ざわりのようである。

「悪人の声は大きへ Муу хүний дуу их

悪山羊の啼き声は大きじ」 Муу ямааны май их (7736)

「^{*}ラマが歌をうたえば還俗のしるじ Хувраг хүн дуулбал хувйрахын тэмдэг

小さい耳の山羊が啼けば死のしるじ」 Хув ямаа майлбал үхэхийн тэмдэг (4720)

「ラマは悪くなると歌をうたう Дам муудвал дуулах

山羊は悪くなると啼へ」 Ямаа муудвал майлах (1774)

* ラマ……僧侶

「ラマが歌を歌う」とは、本来、経を読まなければならぬ僧がそれを止めて歌を歌う、つまり僧の役目を放棄するという意味である。

また、山羊は貧乏の代名詞のようにさえ扱われたりする。

「貧乏な人には Длсан хүнд

山羊は家畜」 Ямаа мал (11033)

普通の人にとっては、山羊はまるで家畜ではないかのような扱いである。山羊に対する価値観の低さを象徴するような諺であるが、次の諺と合せて考えてみると山羊と貧乏人との関係がよく分る。

「貧乏になると山羊を飼い Длдуурахад ямаа харигулах

金持になるとラクダを飼う」 Баржихад тэмээ харигулах (5893)

ラクダと山羊の価値をボドというモンゴルの家畜換算法で見ると、大体ラクダ一頭は山羊の一四〜二〇頭分にも相当する。羊と比較して七〜一〇頭、牛・馬でも一・五〜二頭分とされている。言い換えれば、家畜を多く持たない貧乏人にとってみればラクダ二頭持った所で大した生活の足しにならないが山羊四〇頭持てば生活できるということになり、勢い貧乏人の家畜に占める山羊所有の割合は高くなる。そしてラクダは富の象徴、山羊は貧乏の象徴ということになるわけである。

民話の中でも、山羊は貧乏を強調する役割を担ってしばしば登場する。「貧欲婆さん」(Хордог эмгэн)²²や「山羊飼いの貧乏男」(Ямаа харигулагч дилүү хүү)などはその好例であろう。これらの物語はいずれも、主人公が

「数匹の(黒い)山羊を飼って生活していた」という表現によって、その主人公の貧乏さが強調されるといった手法がとられている。そこに「貧乏な婆さん」、「貧乏な青年」といったような「貧乏」という言葉が入っていないと「数匹の山羊を飼う青年」というだけで、モンゴル人に「貧乏」を説明するには充分なのである。

山羊がこのように貧乏の代名詞のように考えられる一つの理由は、前述したようにその経済的価値の低さにあるが、もう一つの要因は、山羊のもつ習性にあるものと思われる。山羊の習性について加茂儀一氏は『家畜文化史』の中で、「：山羊は長い間の家畜状態にもかかわらず、未だにその野生のままの性質を失わないでいる。そして元来高地を好む山羊は家畜化の結果、比較的平地に慣らされたのに対して、家山羊はそれに満足しないで、むしろそこから離れた所にある石ころの多い、けわしい岩の斜面を何の苦もなくよじのぼり、岩の間に生えている灌木の枝葉や半分枯れかかった芝草を好んで食べている」と述べているが、山羊のこの習性が、モンゴル人の「山羊イコール貧乏」といった考え方を生み出しているようである。山羊の好む石ころのころがる草の乏しい土地——これはまさに貧乏階級の生活する土地であり、そしてその乏しい草を求めて大声でメーメー啼きながら石ころの多い斜面を上り下りし、あさるように草を食べる山羊の姿からモンゴル人は「貧乏」を連想したのである。因にヨーロッパでも山羊は「貧乏人の牝牛」と呼ばれていたという。

七、羊

羊はモンゴル牧民にとって、日常の必要を満たす最も重要な家畜であり、基本的な財産である。肉、乳、内臓、

血は食料に、毛はフェルト、毛織物、敷物、毛皮は主に冬の衣服、フンは燃料、骨は子供の玩具や占いにといった具合に、何一つ無駄にされるものはない。とりわけ羊肉は常食として最も好まれ、単に「肉」と言えば羊肉を指し、牛肉や豚肉は必ず「牛」、「豚」という語をつけて呼ばれるのである。

このように最も経済的価値が高く、その数も一番豊富な家畜ではあるが、羊は諺や民話の中では余りその特徴は描かれていない。これは恐らく、人間との関わり方が馬やラクダなどと違って一対一の接触がなく、しかも野性の性質を失い、全く性質が温順化した羊には山羊にみえるような極立った特性もないといったことに帰因するであろう。また羊は人を乗せることも、役畜として使われることもなく、単に食料や必需品を提供するだけといったその役割も要因となっているのであろう。

羊は、その肉の旨さとその経済的価値の高さが称賛される以外は、山羊のように、その習性がボロクソに非難されることもないし、また逆に馬のようにモンゴル人の伴侶として迎え入れられて称賛されることもない。その性質の温順なことが強調されるのみである。会話の中でも「羊のように温和な」(Хонь шиг томоотой) といった慣用句がよく使われる。

「羊のそばでは英雄 Хонинь дэргэд баатар

英雄のそばでは羊 Баатрын дэргэд хонь (4584)

弱い者の前では強がり、強い者の前に出ると温和になる者の喩えである。

「狼は羊を Чоно нь хонио

金持ちは貧乏人を」 Байн нь ялдуугаа (5389)

弱い者いじめの最たるものとして狼がよく登場するが、弱い者の代表としては常に羊が引合いに出されるのである。事実、モンゴル草原では狼は羊の大敵であり、羊は自らを守る術を全く知らない。一夜のうちに百頭もの羊が狼に殺されたといった話は今でも時々ニュースになる位である。普通強い動物は食う為弱い動物を殺すが必要以上殺さない。しかし、狼は猫がネズミをなぶるように羊群をおそい手当り次第殺傷して楽しむという。

羊はなんといつても、その肉を提供することによってモンゴル人に貢献しているわけで、それを称賛する諺は多い。前述したように、羊は毛や乳なども重要な必需品として利用されるわけであるが、それは余り言及されない。羊というとモンゴル人にはまず肉が想起されるのである。

「羊をもっている人は食料もち」 Хоньтой хүн хоолтой

ランブをもっている人は明かりもち」 Хорлогтой хүн гэрэлтэй (4562)

「後妻は Хойт гэрлэй

羊の肉と同じ」 Хонинь махтай адил

山羊に比較して羊の肉がいかに高い地位を得ているかは、山羊の項で述べた通りである。

むすび

「乳の(出)なら羊は絆好き」 Суутгүй хонь холбоосой

信心のなら女は祈り好き」 Сүсэлгүй хүүхэн мөргөлсөй (3361)

とか

「乳の（出）ない羊は絆好き」 Сүүлгүй хонь холбоонд дуртай

経の（読め）ないラマは寺が好き」 Номгүй лам сүмд дуртай (3362)

という諺がある。「乳の出ない羊は絆好き」とは一体何の事だろうか？ 羊は乳を搾る時、一本の綱に頭を向い合せに並べて繋ぐが、乳の出ない羊は、その必要がないので綱に繋がれない。他の羊が繋がれるのをみると、乳の出ないその羊も繋がれたがって、綱のまわりをウロウロするのだそうだ。そんな事から、自分には出来ないくせに、他人がやっていることを真似したがることの喩えになるのだという。羊を飼って生活している牧民にとっては、何のこともない諺であろうが、羊の習性、牧畜生活に無縁な我々日本人には、この諺一つ理解するのもそう容易なことではない。結局、諺に限らず、他民族を理解するためには、その民族の基盤になっている生活の土台を知らなければならぬという事であろう。

本稿では、モンゴル牧畜の中心である馬、ラクダ、牛、山羊、羊の五種家畜についてのみ考えてみた。しかし家畜それぞれの習性、あるいは牧畜自体について余りに無知であるために、充分にモンゴル人の家畜観を引き出す事が出来なかった。又、ここに述べた五種家畜だけではなしに、モンゴル人の生活と深い関わりをもち、諺などにも多く登場する犬、狼、狐、鹿、ネズミ、タルバカンなどについても言及したかったが、力が及ばなかった。稿を改めて考察したい。

尚、本稿の諺の解釈などについては、木村肥佐生・アジア研究所教授、在日モンゴル大使館参事官ゼネメデル氏、同書記官サンダグ氏、同書記官バータル氏などから多くのご教示をいただいた。記して謝意を表したい。

註

1. 松田修「日本古典植物辞典」講談社、昭和五十五年、三〇三、三二〇頁
2. 那珂通世訳「成吉思汗実録」巻二、四八頁、筑摩書房、昭和十八年
3. Ж. Дашдорж, Г. Рэнчинсамбуу, Монгол Цэцэн Угийн Дагай I—II, Уланбаатар, 1964, 1966
4. モンゴル牧畜の起源、形態などについては、後藤富男「駱馬遊牧民」近藤出版社、一九七〇年、今西錦司「今西錦司全集(2)」（遊牧論）講談社、昭和四十九年、などに詳しい。
5. БНМАУ-ын Статистикийн төв газар, Уланбаатар, 1976
6. Ц. Өлзийхутаг, Ерөнхийн гурав, ШУА Хэл Зохиолын Хурээлэн, Уланбаатар, 1961
7. 磯野富士子訳、モスタールト「オールドスロ碑集」二四六頁、平凡社、昭和四十一年
8. 前掲、那珂通世訳「成吉思汗実録」巻三、九八頁
9. Ж. Жамваа, Хурдан Мориньы Шинж, Анхдугаар Таван жил сонин үйлдвэр, Зуун мод хот, 1971
10. G. Clauson, Turkish and Mongolian Studies, London, 1962
11. У. Загдсүрэн, Монгол Ардын Улгэр Уланбаатар, 1969
12. 東亜研究所訳、G・ポターニン「西北蒙古誌」巻二、龍文書局、昭和二十年
13. БНМАУ Ардын Боловсролын Яам, Алтан Мөнгөн Бөмбүүлэй, Уланбаатар, 1975
蓮見治雄訳、D・ツェレンソドノム「モンゴル民話研究」、開明書院、一九八一年
14. Ц. Өлзийхутаг, Түмэн Оньсого, ШУА Хэл Зохиол Хурээлэн, Уланбаатар, 1966

- 15、前掲、磯野富士子訳「オルドス口碑集」二二七頁
- 16、Ж. Жамъянсүрэн Эв Эүй, Ардын Боловсролын Яам, Уланбаатар, 1969
- 17、D. Солономдаржаа, Дорно Дахины Ардын Үлгэр, Уланбаатар, 1972
- 18、前掲、磯野富士子訳「オルドス口碑集」一三八頁
- 19、前掲、蓮見治雄訳「モンゴル民話研究」三三四頁
- 20、前掲、東亜研究所訳「西北蒙古史」三三八頁
- 21、前掲、蓮見治雄訳「モンゴル民話研究」三二五頁
- 22、前掲、Алтан Мөнгөн Бөмбүүтэй
- 23、前掲、У. Загдсүрэн, Монгол Ардын Үлгэр,
- 24、加茂儀一「家畜文化史」、法政大学出版局、一九七八年、七七五頁